遙かなる男

遙かなる男

ポケット文春 200

1970年4月20日　第1刷

定価 320円

著者　三好　徹
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3
TEL (265) 1211
郵便番号 102

印刷　凸版印刷
製本　中島製本

©Tōru Miyoshi 1970
Printed in Japan

万一落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

遙かなる男

推理長篇

三好　徹

文藝春秋

装幀　鈴木　初男

九　蓮　宝　燈

1

人間の生涯に大きな影響をあたえる事件であっても、その発端は多くの場合、ごくありふれた様相を呈しているものである。南郷竜也の場合も、その例外ではなかった。それは羽田到着のジェット便が、定刻よりも二十分遅れるというかたちではじまった。

到着ロビイは、迎えの人びとで溢れていた。人いきれとドアがしばしば開閉されるために、冷房もあまり効果がない。係長の牟田が腕時計をちらりと見てから、課長の吉野を誘った。

「時間があるようですから、コーヒーショップで冷たいものでものみませんか」

じっさい、その日は朝から容赦なく強い陽差しが照りつけて、六月初旬であるにもかかわらず、一日じゅう盛夏をおもわせる暑さだった。時刻は七時になっていたが、その熱気はいぜんとして残っている。竜也は吉野課長もこの考えに賛成するものとばかり思ったのだが、吉野は気のない声で、

「そうだね。しかし、二十分遅れといってもどうなるかはわからない。もし遅れが回復したりすると、林君に悪いからな」

といった。

林というのは、竜也ら三人の東西商事社員が待っている人物である。林正謹といい、ホンコンに住む英国籍の中国人だった。課長の吉野が動こうとしないので、竜也も牟田も動くわけにはいかなかったが、牟田は内心そのことに不服のようであった。飛行機の遅れが回復したさいは、案内アナウンスがあるはずである。通関手続の時間を考えれば、冷たい飲みものをとるくらいの余裕は、じゅうぶんにあるのではないか。

しかし、かれはそれを口には出さなかった。牟田にはどこか気の弱いところがある。それに、学歴がないために吉野よりは年齢は上でも、職制では下になっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

その気まずさをまぎらわすためか、牟田は竜也に話しかけてきた。
「林君というのは、これの名人だそうだよ」
そういって、かれはマージャン牌をつまむ真似をしてみせ、さらに、
「ちょうどいい機会だから、歓迎マージャン大会を開いて、お手合せしたいもんだね。南郷君あたりが幹事になって、設営してくれないか」
といった。
竜也には、いかにも牟田らしい考え方のように思われた。四十なかばになっても、牟田はやっと係長である。仕事ぶりはいたってまじめであるが、定年まで勤めたとしても、せいぜい課長かよくて部長代理であろう。本人もそれを自覚していて、大きな望みは持っていない。土曜日の午後、仕事を終えたあとのマージャンを、唯一の愉しみとしていた。
竜也は、そんな牟田に対して、なぜか親しみをおぼえていた。吉野をカミソリとすれば、牟田は比較にならぬほどのナマクラである。が、それは必ずしも牟田の資質が劣っているためではない。旧制の中学しか出ていないために、何度か昇進の道をふさがれ、それがかれを無気力にしたともいえるのである。
竜也は相槌をうった。
「歓迎マージャン大会はいいですね。本場の名人がどれくらい打つか、お手並拝見といこうじゃないですか。あしたはちょうど土曜日だから、メンバーを集めておきますよ」
そのとき、通関出口から、旅客が姿を現わしはじめた。
「あれッ、もう着いたんですかね」
牟田の頓狂な声に、吉野が答えた。
「ホンコン便じゃなくて、ハワイ発の飛行機のお客さ」
吉野の説明を裏付けるように、出てくる客の中には、パイナップルの紙袋をぶら下げているものもいた。ハネムーンの帰りもまじっていて、迎えにきている母親に抱きつくものもある。
「南郷君、羨しくはないかね」
と、吉野がうながすようにいった。
「いや、別に」
竜也はそっけなく答えた。心のなかを正直にさらけ

だせば、じつは羨しくないこともなかったが、吉野にそういわれると、なんとなく反撥したくなるのであった。
「おや？」
と不意に小さく声を挙げたのは、牟田であった。
竜也は、牟田の視線を追った。ひとりの日本人が通関出口に姿をあらわし、ロビイの様子を感慨深げな眼差しで見回していた。
男は四十前後で、独りであった。肩からショルダーバッグを下げ、手には大型のトランクを持っている。そして、そのトランクをかかえ直すと、通路を出てきた。
ゆっくりとした足どりだった。何年ぶりかで踏む故国の土の感触をなつかしんでいる、といったふうな歩き方のように思われた。少くとも、竜也にはそう見えた。
男は、竜也たち三人のいる前で立ちどまり、トランクを下に置くと、ポケットからタバコをとり出した。それをじっと見ていた牟田が、かすかに首をかしげてから、
「まさかね」
と小さく呟きをもらした。
吉野がそれを聞きとがめた。
「牟田君、どうかしたのか」
牟田は子供がいやいやをするように、
「いいえ、なんでもないんです」
「でも、顔色が悪いぞ。大丈夫かね？」
「本当になんでもないんですよ」
「それならいいが……」
吉野は、それでも気になるとみえ、じっと牟田を見守った。牟田はハンカチーフを出して、しきりと首筋の汗をぬぐった。気分が悪い、というよりも襲ってきた昂ぶりを抑えかねている感じだった。

2

林正謹の乗った飛行機が到着したのは、それから十分後だった。通関手続に約十分かかったので、じっさいには二十分後になる。
竜也は吉野に命ぜられて、東西商事と書いた紙を掲げた。きまり悪かったが、課長の指示にしたがわない

わけにはいかない。林正謹の顔を知っているのは、かれと会って契約してきた部長の片桐だけであり、その片桐は、あいにくと自動車事故で入院中なのである。三人とも林に会ったことがない以上、そうするしかなかった。

もっとも、林正謹の写真は見ている。林が参考のために、と自分から送ってきたのだ。

林正謹は、ほとんど最後に姿を現わした。写真で見るよりも、大きな印象をあたえる男だった。体格もがっしりしている。顔は浅黒く陽灼けしており、ほころばせた口もとから白い健康そうな歯並みがのぞいた。三十八という年齢よりも若く見える。

林は、竜也の掲げている紙片を見ると、流暢な日本語で、

「こんな遅い時間にすみません。わたしが林です」

といって頭を下げた。

竜也は、林の日本語に驚かされた。前もって、日本語が上手であると聞いてはいたが、その巧みさは予想をはるかにこえていたのだ。ほとんど訛りがない。

「いやア、いいんです」

牟田がまっさきに答え、まず自分が名乗ったのちに、吉野と竜也を紹介した。

それぞれに挨拶が終ると、四人はタクシー乗場に出た。

ホンコン育ちの林正謹にも、この夜の暑さがこたえるのか、しきりと汗をぬぐいながら、竜也に話しかけてきた。

「今夜はむしむししますね。ホンコンも暑いことは暑いですが、もう少し、からっとしていますよ」

「そうですか。ぼくはまだ行ったことがないのでわかりませんが、あちらも暑いそうじゃありませんか」

「暑いことはたしかです。でも、もうちょっとしのぎやすいですね」

林はタバコをとり出し、竜也たちにすすめた。巻き紙に色がついている。牟田が一本つまみあげながら、

「ほう、ホンコンのタバコは、みんな、こんなですか」

「いや、この銘柄だけですよ」

牟田はマッチをすった。だが、海からの風が強い。炎がともったかと思うと、軸木に燃えつかぬうちに消えた。

すると、林がなにか中国語でいった。
中国語のわからない牟田が聞き咎めるように見かえした。林は弁解するように、こんどは日本語で、
「いや、失礼。いまのは、中国の古い詩にあるんです。日本ふうに読めば……」
竜也は林の説明よりも先に言葉を口に出した。もしかすると、中国語を解するのだ、と自慢したかったのかもしれない。
「……百年ハ幾バクノ時ナラズ、奄チニシテ風中燭ノ如シ、でしょう?」
林の眼が、心もち鋭くみひらかれた。少くとも竜也には、そう感じられた。が、それはすぐに元どおりの柔和な眼になった。
「驚きました。南郷さんは、中国語がお上手なんですね。どこでお習いになったんですか」
「学校ですよ」
「でも、学校だけでは、とてもそれくらいに喋れるようにはならんでしょう。しかも、ほとんど完全な北京官語ですね。南郷さんならば、北京生まれだといっても、通用しますよ」
「まさか」
「いや本当です。感服いたしました。先生はどなたですか」
「江川先生とおっしゃる方なんです」
「江川先生?」
「名前をお聞きになったことありますか」
「いいえ」
林は激しく首をふった。それまで黙っていた吉野が、口をはさんだ。
「東京にいる間は、牟田君と南郷君が世話することになっているからね。なにかわからないことがあれば、遠慮なしにきいて下さい」
林は頭を下げ、
「よろしくお願いします」
といった。
予約しておいたホテルに着くと、吉野は、取引先と銀座で待ち合わせの約束があるから、といってロビイで別れた。
林は礼儀正しく見送ってから、あらたまった口調で、竜也や牟田に、迎えの礼をいった。

牟田は、
「さっき課長もいっていたけれど、なにかわからんことがあったら、構わずにいって下さい。もっとも、林さんは東京は初めてじゃないんでしょうから、わからんことはないでしょうが」
林はきまじめな表情で答えた。
「東京は初めてなんです。東京どころか、日本そのものが初めてなんですよ。この前ホンコンに見えた片桐部長のお力添えで、皆さん方といっしょに仕事をすることにきまったときは、日本にこられることが何よりも嬉しかったですね」
「へえ、本当にきたことがないの？」
「本当です」
林は、牟田のいくぶんか狎れた口調にまきこまれずに、いやに荘重にいった。

3

林を部屋へ送りこむと、竜也と牟田はロビイに戻った。
「南郷君、どうだい、一杯やっていかんか」
牟田はグラスをあけるしぐさをした。
竜也はこれまでにも何回か牟田といっしょにビヤホールやバーなどへ行っている。飲めば愚痴を聞くようになるのがわかっていたが、独り暮しの竜也には、ことわる適当な口実がなかった。
「じゃ、生ビールでかるくやりましょう」
と応じて、ホテルの屋上にあるビヤガーデンへ行った。
風通しや眺めがよいためか、席はほぼ満員だった。竜也たちはようやく隅に空席を見つけ、眼下のネオンの煌きやそのかなたにある東京湾の船の灯を眺めながら、ビールをのみはじめた。
予期に反して、牟田の話は、仕事の愚痴ではなかった。仕事の話も出ることは出たが、それは竜也が出張を予定されている広州の見本市に関したことだった。つまり、竜也という中国語のじょうずな社員がいる以上、高い金を払って、林正謹を契約した会社の気がしれない、という批判だった。かれは、
「片桐さんは、きみの語学力を不当に低く評価してい

るんじゃないのかな。わたしには、そうとしか考えられんが……」
と、柿の種をポリポリ音を立てて噛みながら、心外そうにいった。竜也は、
「でも牟田さん、中国語というのは、あれでなかなか大変なんですよ。北京、上海、広東とそれぞれに違うんです。ぼくが習ったのは北京官語つまり標準語なんですが、広州じゃ通じない恐れもあるんです。部長はそのへんのことも考えて、林さんと契約したんではないですか」
「そりゃ、そうかもしれんが……」
牟田はビールをのみ、ちょっと考えてからいいにくそうに、
「じつはね、ちょうどいい機会だから、きみに相談があるんだ」
といった。竜也は、相手の顔を見守った。牟田は再びビールをのみ、眼をそらせた。咽喉もとまで出かかっている言葉を、流しこむビールによって抑えているといった感じだった。
「牟田さん、何です?」
「じつは、それなんだが……」
牟田は口ごもった。よほど話しにくいことらしい。
「遠慮なくいって下さいよ」
「うん」
しかし、かれはいっこうに切り出そうとしなかった。落ち着きのないしぐさでビールをのみ、柿の種を噛みくだいた。
ようやく決心したらしく、牟田がジョッキを下に置いたとき、竜也は、先刻から空席になった隣りのテーブルに、一組の男女が腰を下ろすのを見た。
女は三十六、七である。中国服を着ており、耳にヒスイのイヤリングをつけていた。
連れの男には、見覚えがあった。空港のロビイで見かけた男だった。ふたりは寄りそうようにして坐った。そして、男は手を挙げてボーイを呼び、チケットを渡すと、英語でなにかいった。
どうやら、日本人ではなかったらしい、と思いながら、竜也は牟田に視線を戻した。そして、牟田の表情がひきつったようになっているのを認め、息をのんだ。
「牟田さん、どうかしたんですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

小声で注意をうながすと、牟田は、はっとしたように、
「いや、別になんということはないんだ。ちょっと想い出したことがあってね。しかし、思い違いのようだ。気にしないでくれ」
追及するのも悪いような気がして、竜也は、
「それならいいですが……。で、相談というのは？」
「つまりだね」
牟田は口ごもり、隣席の方をちらりと眺めた。中国人のカップルはもの珍しげに、周囲を見ていた。視線がかち合ったのか、牟田はあわてて顔を戻した。竜也は気になったが、質問はしなかった。牟田の言葉を待って、かすかに眼もとを染めている相手を見守った。
牟田はおもむろに口をひらいた。
「さっきもいったが、あしたの林君の歓迎マージャン大会ね。会場はどこにしたらいいかな」
「ああ、そのことですか。それは、ぼくが設営しますよ」
そういったものの、竜也は、牟田の相談しようとしたのは、そんなことではない、と思った。なにか別の問題だったにちがいない。そして、もしかすると、それは隣りのカップルと関係があるのではないのか。
「そうか。じゃ、南郷君に一任するよ。林君はおそらく坐るのに馴れていないだろうから、椅子席でマージャンもできるし、食事もとれるところがいいな」
「そうですね。近ごろは、そういう店でデラックスなのができているから、大丈夫でしょう」
「じゃ、頼むよ」
牟田はそういって立ち上った。
竜也は、その後に従いながら、念のために振り向いて中国人カップルをそれとなく観察した。
かれらは静かにビールを飲んでいた。ただそれだけだった。どこにも不審の影はなかった。あるとすれば、それはかれらの方ではなく、逃げるようにしてエレベーターに向って歩く牟田の方だった。

4

つぎの朝、南郷竜也がはやめに出勤してみると、牟田は係長席でかなり古いものと思われる書類をとり出

して、調べものをしていた。
竜也が挨拶の声をかけると、牟田は書類をはぐる手を休め、
「やあ、ゆうべはどうもありがとう」
といった。
あらたまって礼をいわれると、竜也は面映ゆかった。まわり道にはなったが、牟田を自宅まで送り届けただけのことであった。
「いやア、とんでもない。それより、牟田さんにあんな大きなお嬢さんがいるとは、知らなかったですよ」
「淳子のことかね」
牟田は相好を崩した。
竜也は、淳子という名前なのか、とおもった。前夜かれを送って行ったさい、玄関の昏い光のなかで見ただけだったが、その清楚な美しさが印象に残った。牟田に娘のいることは聞き知っていたものの、会うのは初めてだったのである。
「牟田さん、失礼ですが、お嬢さんはおいくつですか」
「二十歳だよ」
「それじゃ、おたのしみですねえ」
「おいおい、年寄りじみたことをいうなよ」
牟田はたしなめるようにいったが、しかし悪い気はしないらしく、にこにこしていた。
そのころになると、課員の顔ぶれも揃い、活気がみなぎりはじめた。ただ、課長の吉野だけがまだ現われない。竜也と同年入社の堀内が、空いている課長席を見て、
「どうしたんだろう？　珍しいね」
といった。
じっさい、吉野が定刻までに出社してこないということは、めったにないのだ。隙のない性格そのままに、仕事にも時間にも正確であった。すると、牟田が説明した。竜也らが出社してくる前に、すでに連絡があり、自動車事故で入院中の片桐部長のもとへ寄ってくるので、一時間ほど遅れることになるだろう、というのである。
牟田はさらに竜也に向い、
「きみと堀内君とで、ホテルに林君を迎えに行ってくれないか。課長は十時ごろまでには見えるだろうからね」

「わかりました」
「例の歓迎会の方は、わたしが手配しておくよ」
牟田はそういうと、ふたたび書類調べにもどっていった。
竜也は、堀内と連れ立って、会社を出た。虎の門の交差点に近い東西商事から、林の泊まっている新橋のホテルまでは、歩いても十分くらいのものである。
前日にひきつづき、気温は高かった。汗かきの堀内は、すぐに上着をぬいで手にかかえ、
「なんだい、例の歓迎会というのは？」
と訊いた。
「林さんという人がね、マージャンの名人なんだそうだ。それで、牟田さんは、きょうの午後、歓迎マージャン大会をやろうというのさ」
「そうか、あの人は好きだからな。いつだって、三人足りないのくちなんだから」
堀内の口調には、軽蔑の響きがこもっていた。
三人足りないのくち、の意味はこうである。マージャン狂の牟田は、土曜日になると、竜也たちにそっという。
「きょうどうかね。いまメンバーを集めているんだが……」
マージャンは四人集まらなければ、ゲームができない。そして、三人まではメンバーが揃っているにもかかわらず、あとのひとりがどうしてもいない、というケースはよくあることなのだ。牟田のいい方は、三人までは集まっている、というふうに聞こえるが、その実、ゲームをやりたがっているのはご本人だけなのだ。
堀内が牟田を侮る気持もわからないではないが、竜也の考えは別だった。出世の望みのない牟田が、週に一度、マージャンに興ずるのを誰が責めうるだろうか。
「まア、いいじゃないか」
竜也はそういいながらも、前夜のビアガーデンでのやりとりを想い出した。
あのとき、牟田は、相談がある、と竜也にいった。そして、その内容を質問されると、歓迎会の場所をどこにするかの件だ、と答えた。相談、というほどの問題でないことは、明白であるように思われる。現に、前夜はその手配を竜也に頼んでおきながら、この朝は自分で手配するというのである。それをおもえば、相

談したいことがほかにあったのは、ほぼ間違いないであろう。
牟田は何を相談したかったのだろうか、と竜也は自問してみたが、もとより、その答えを見出すことはできなかった。

5

ふたりがホテルの林正謹の部屋を訪れてみると、かれはすでにきちんと身なりをととのえていた。
竜也が堀内を紹介すると、林は礼儀正しく挨拶した。林の喋る日本語に、堀内も感心したようだった。
「林さんは本当に上手ですね。どこで習われたんですか」
「ホンコンですよ。日本語学校もあるし、日本の方も沢山いますから」
「それにしても、オドロキです」
林はにこにこした。そして、トランクの中から角張った包みをとり出して小脇にかかえると、
「では、参りましょう」
とうながした。
林がいっしょなので、竜也たちは、ホテルの前からタクシーにのった。
大通りに出ると、林はもの珍しげにあたりを見まわし、さらに行く手の空に聳え立っている高層ビルに、かなり大げさな感嘆の声をはなったりした。竜也は、それとなく、この異邦人というよりも日本人としか見えないような男の顔をうかがった。その感嘆ぶりに、なにかしら演技的なものがひそんでいる、と思われたからである。しかし、その理由を詮索する間もなく、車は、東西商事のあるビルに着いた。
竜也は、堀内に頼んで林を応接室へ案内してもらい、かれの所属する営業課に戻った。
課長席には、いぜんとして、吉野の姿はなかった。
「牟田さん、課長はまだですか」
「もうくるころだと思うが、林君は？」
「応接室へ案内しておきました」
「そうか。じゃ、こんごの予定だけでも、先に説明しておこう」
牟田は、書類を引出しに収いこんで、竜也にもいっ

しょにくるように、といった。
林は、牟田の顔を見ると、前夜の出迎えの礼をのべたのち、持参した包みをほどいた。出てきたのは、三本のブランデーだった。ナポレオンのクルボワジェである。デパートで買えば一本二万円はする高級品だった。林は、一本は片桐部長あてのものだが、残りは皆さんで召し上ってくれ、といって差し出した。牟田は、
「これは恐縮ですな。じゃ、ありがたく頂戴しますが、片桐部長はまだ入院しておられるんですよ。交通事故に遭われたのは、ご存知ですね」
「はあ、それはホンコンを発つ前にもらった本社からの手紙で知りましたが、よほどお悪いんですか」
「そうですねえ。長くかかるような話も聞いていますが」
「そんなにひどい事故だったんですか」
「事故というよりも、災難といった方がいいでしょう。なにしろ、轢き逃げに遭ったんですから」
それを聞くと、林は心細げに吐息をもらした。
林が不安そうになるのは、無理からぬことかもしれなかった。かれをやとったのは、片桐なのである。林にとっては、保証人のようなものといっていいだろう。
「そうでしたか。轢き逃げだとは、ちっとも知らなかったです。で、犯人はつかまったんですか」
「それがね、つかまらんのですよ。轢かれて意識不明になっていたのを、しばらくたってから発見されたような始末でしてね……」
説明を牟田に任せて、竜也は堀内とともに課に戻った。
出勤してきたばかりらしい吉野が、女子社員の淹れた茶をのんでいる。そして、竜也の報告を聞くと、すぐさま立ち上って、応接室の方へ消えた。
吉野といれかわるようにして、牟田が戻ってきた。かれは席につくなり、竜也に耳打ちした。
「歓迎会の件は、林さんにも話しておいたよ。喜んで参加するそうだ。会場その他の手配はすっかりすんでいる」
「課長にも話してあるんですか」
「うん。ちょっと迷ったんだが、いま話してみた。そしたらゲームには参加しないが、終ったあとの会食には出るそうだ」

「珍しいですね」
「部長がおられないから、それだけ気をつかっているんじゃないかな」
牟田のそういう解釈に、竜也はすなおに同調できなかった。吉野はルールくらいは知っているという話であるが、かれが課員たちと卓を囲んだという話は聞いたことがない。林に対して歓迎会を行う必要を認めれば、マージャンのあとではなく、課員全部が出席できるような席をつくるだろう。上司の片桐が契約してきた人間とはいえ、そこまで気をつかうことはないように思われるのだ。さらに、ゲームのあとで会食ということになれば、おそらく七時ごろになるはずだった。会社が終ってからの数時間、吉野はどこかで暇をつぶさねばならないわけである。マージャンをしていれば時間のたつのは早いが、そうでない場合、それはかなり長い時間といわねばなるまい。吉野は、その間、どうやって過すつもりなのか。
しかし、吉野が認めたせいもあってか、参加者はかなりふえ、林正謹をふくめて八人となった。両卓になったわけである。
それをもっとも喜んだのは、牟田であった。
「南郷君、こういうのを嬉しい誤算というんだろうな」
とにこにこした。
そのいきいきとした表情を見ては、竜也は胸のなかの疑問を口に出せなくなった。いえば、せっかくの喜びに水をさすようなかたちになる。
「よかったですね」
というしかなかった。

6

会場は、東西商事の近くにある中華料理店があてられた。椅子席の小部屋がいくつかあり、ほかの部屋からも、牌を打つ音が聞こえていた。
牟田は、林の紹介やメンバーの割りふりなど、日ごろの仕事ぶりからは想像もつかないような、きびきびした態度で行なった。それがすむと、牟田が立ち上った。
「じゃ、これから林さんの歓迎マージャン大会をはじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton